

季節は春です。夏時間に戻り、日照時間も毎日分刻みで長くなってきています。心もなぜか浮き浮きし、お日様の恵みを体中で受け止めたい季節となってきました。そしてこの時期、日本中の幼稚園、学校、社会では新しい出発の光景が見られます。私事ですが、私の二人の子どもはベルギーの幼稚園に入園し、そして現在ベルギーの大学に通っています。しかしベルギーの幼稚園や学校では入園、入学式はありませんでした。特に小学校、中学校の入学については、当時は9月の間に所属する学校を決めなければならないという取り決めだけで、9月中は新しい顔が教室に現れ、そして知った顔が教室から去っていくという、日本では考えられない1ヶ月だったと言っていたような記憶しています。二人の子どもにとって、初めての式典は日本人学校補習校への入学式でした。特に上の子にとって「一体全体入学式とは???'と不思議だったようです。そして最後の入学式が補習校中学部への入学式となり、それ以降、二人は入学式を体験していません。同じように、入社式というような言葉もないようです。私たちにとって4月1日は社会人としてのスタートの日というイメージが強いのですがね。

自分自身の社会人初年度はどうだったかなとかこれ30年近く前のことを思い出してみました。私の入社した会社は大阪の鋼管メーカーで、入社式前に工場の寮に入寮し、そこで研修を受けるようになっていました。しかし技術的研修の前に、社会人としての研修を受けるため、入社式の後1週間は工場の寮から本社へ通勤し、一日中専門家の講師の下に社会人研修を受けました。電話の取次ぎや席次、数字の読み上げや車での席次など13人の同期生が朝から夕方まで顔を突き合わせ、社会人としての最低のマナーなどを学びました。そして最後の日は全員で夜の街に繰り出し、危うく門限に遅れそうになったことを覚えています。それ以降は工場研修で鉄の基本から自社製品の特性までの研修を受けました。文系育ちの私には目にする事耳にすることすべてが新しく、そして日常生活では考えられない細かい取り決めのある公差などに驚きを感じました。そして1ヶ月の研修が終わり、本社の販売部に配属され、それが社会人生活の始まりとなりました。そして先輩方にとっても大切な言葉を頂いたのもその頃でした「営業マンは得意先さんのお話を聞くことで社会勉強をしている。だから君は会社から授業料をもらい、そして勉強させてもらっている非常に贅沢な時間を過ごしているということなんだ。本当に感謝の気持ちがあるのなら、利益を上げるだけでなく、自分を磨いてなるべく早く恩返しをすることだな」。今でもこの言葉は大切な私の宝物の一つです。

さておもしろいもので、どんなに老けた顔をしていても、どんなに上手にスーツを着こなしていても、やはり新社会人はすぐに判ってしまうのですね。やはりなれないネクタイ姿が似合わないからなのか、会話の端々に学生の雰囲気が残っているためなのか、なぜなのでしょうね。

私たちの幼稚園には残念ながら毎年新しい先生を迎えることはありません。しかし、毎年新しい出会いがあります。ベルギーで3歳になり、この幼稚園に入園してくるお友達。既に現地の幼稚園生活を経験し、この幼稚園に入園してくるお友達。日本で2年間の幼稚園生活を体験し、立派な年長児として入園してくるお友達など、色々な新しいお友達との出会いがあります。そしてどのお友達にとってもこの幼稚園は未知の世界。どんな先生がいるのか、どんな遊びができるのか、どんなお友だちがいるのか、文字通りドキドキしながら登園を始めます。そしてすぐに幼稚園に馴染み、毎日楽しく遊んで帰ることのできる子どももいれば、毎日お母さんに泣きながらしがみついている子どももいます。どの姿が善い悪いとはいえません。どの姿もその子どもにとって自然な感情の表れだと思っています。逆に感情を表すことなく大人や親の指示に従っている子どもの方が不自然に見えます。この時期の幼稚園は子どもたち全員が違って当たり前なのです。

幼稚園に通い始めるということは、初めての集団生活を送るということです。そしてそれまで保護してくれた親の元を離れ、幼稚園で過ごすこととなります。そして意外なことに、毎日の園生活で子どもは子どもなりにストレスを感じています。友達との駆け引きや自分自身への誇り、できないことへの挑戦、人ができることを自分もやってみようという気持ち。自分より大きい子どもや強い子どもへの憧れ。そして自分の思うままに振舞う

ことができない辛さなどを毎日感じて生活しています。しかし、この我慢がとても大切なことなのです。世の中何もかも自分の思う通りに生活している人は皆無だと思えます。それぞれがそれぞれの役割を持って、それを勤めることで人生という名前の人間生活を進めていくと思えます。その役割を放棄するとき、他人からの助けは期待できないのが当たり前のことです。自分を守ってもらって生きていくことは、自分の義務を果たす必要があります。その社会の基本的なルールを身に付けるために幼稚園生活があります。家庭の中であれば、家庭内ルールを少し破っても極端に叱られることがないかもしれません。逆に家庭内だからこそ、とても厳しく叱られるかもしれません。幼稚園も同じで、同じ場所で同じメンバーが同じ共通の約束事で生活する練習の場なのです。初めに「お約束の話」をするとき、私たちは必ずどうしてお約束を守る必要があるのかをお話します。それは簡単に言えば「自分を守るため」なのだとお話します。赤信号では人も車も止まる約束になっています。でも赤信号で自分が止まることをやめて歩き続ける小さな子どもでも車に轢かれてしまうことを想像できません。そしてそうすると怪我をしたり亡くなったりすることも想像できます。だから自分がそのような目に遭わないように約束事を守るのだとお話します。自分を守り、人を守るために約束事があるのです。

最近、日本のマスコミによく登場してくるのが「自分で責任を持つから何をしてもよい」と考えている人たちの話です。本当かなあと感じてしまいます。上の赤信号の約束も、自分で責任を持てば渡ってもよいのでしょうか？ ではもしも万が一車に轢かれると本当に自分だけで処理できるのでしょうか？ そこにいる他人への配慮は必要ないのでしょうか？ 歩行者に怪我をさせた運転手は罰せられますが、自分の責任で赤信号を渡った人はその刑を肩代わりすることができるのでしょうか？ 自分で責任を持つと断言することはそれだけ他人への心遣いが必要だとわかっているのかなと思います。大人気ない人たちの話が毎日マスコミに取り上げられていますが、本当にそのような人はまだまだ少ないと思います。そして日本人の分母が少ない当地で生活するチャンスに、もう一度人間らしい姿で生活したいと思っています。

《つづく》